国立病院機構熊本医療センター

No.233

くまびょうNEWS

NHO KUMAMOTO MEDICAL CENTER　KUMABYO NEWS

発行所
国立病院機構熊本医療センター
〒860-0008
熊本市中央区二の丸１番５号
TEL (096)353-6501(代)
FAX (096)325-2519

総合診療科外来スペースが完成しました

いつもご紹介頂き大変有り難うございます。総合診療科は本年の７月から辻隆宏医長が加わり２名体制となり、８月からは救急外来スペースに移動して外来診療体制を強化しております。お陰様で毎日４～６名のご紹介を頂いており、不明熱や原因不明の疼痛などの患者さんの診断治療を行っています（図１）。現在ほとんどの診断検査が受診当日に可能です。時間をかけての診察と迅速な外来検査を活用し「その日のうちの診断」を目指しております。入院の患者さんは感染症や自己炎症性疾患の方が多くなりますが、比較的希とされる疾患にもよく遭遇します。家族性地中海熱はこの１年間で３例ほど経験しました。ご紹介頂けるので、見いだすことができる機会を頂いていると感じています。

早く正確な診断と、迅速なご報告をモットーに取り組んで参ります。よろしくお願い申し上げます。

（統括診療部長　清川哲志）

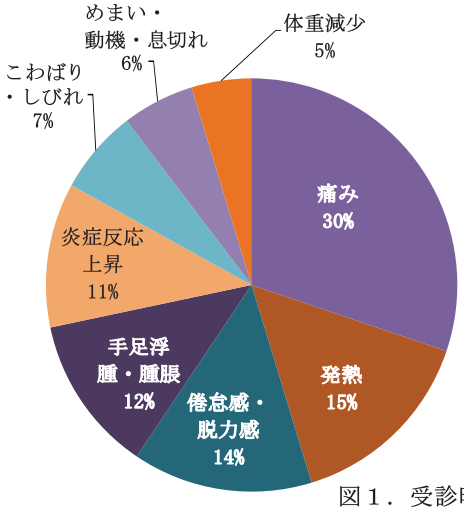


図１．受診時の主訴

基本理念

最新の知識・医療技術と礼節をもって、
良質で安全な医療を目指します。

運営方針

1. 良質で安全な医療の提供
2. 政策医療の推進
3. 医療連携と救急医療の推進
4. 教育・研修・臨床研究の推進
5. 国際医療協力の推進
6. 健全経営

患者様の権利

1. 良質かつ適切な医療を公平にうける権利があります
2. ご自身の医療について理解しやすい言葉と方法で十分な説明と情報を受ける権利があります
3. 病院から説明と情報を得た上で、自らの意志で治療を受け、あるいは選択し、拒否する権利があります
4. 自分の診療記録の開示を求める権利があります
5. セカンド・オピニオンを求める権利があります
6. 個人としての人格の尊重とプライバシーの保護を受ける権利があります

VOICE 登録医の声

「循環器とこころと漢方」

むらかみ内科クリニック
院長　村上 和憲

熊本医療センターの皆様には平素より大変お世話になっております。このたび、熊本市東区山ノ神の東稜高校正門前に内科クリニックを開業いたしました。内科、循環器内科、心療内科、漢方内科を標榜しています。私はもともと、血液内科（熊大第２内科）出身で、その後循環器内科に移りました。また、研修医の頃から漢方好きで、いまは熊大の漢方の講義とポリクリも担当しています。そのような背景から、いろんな不定愁訴の患者さんを見ることが多く、自然と心療内科の分野までカバーするようになりました。

動悸、息切れ、胸が苦しい、などの訴えがあれば、狭心症や心不全を疑って精査することも多いでしょうが、何も異常がなかったという症例は多いと思います。これは心療内科の分野です。また、今年は地震の影響から、夏くらいまではなんとか気も張っていて大丈夫だったという人も、涼しくなってきた頃から次第にこの先の不安が募ってきて、体調に不調をきたしてるような症例が多数来院されています。無理をせずに、抗うつ剤などの力を借りて乗り切ったら良いと思います。しかし、なかには抗うつ剤というと、飲むのに抵抗を感じる人もおられます。そのような場合には、まず漢方薬で体調を整えてみるのも良いと思います。

循環器の分野ではEBMが非常に盛んで、大規模臨床試験の結果に基づく処方を行います。すると、血圧で１つ、高脂血症で１つ、尿酸で１つ、慢性心不全で２つ、胃潰瘍予防で１つと薬の数がどんどん増えていきます。しかし、それら全部を使ったEBMは存在しません。科学的根拠にもとづいていると思っているのは、単なる自己満足、あるいはガイドラインに従っているという安心感を求めているだけかもしれません。心療内科や漢方内科はそのようなEBMが少ないので、特にそういう気がしてなりません。

私はこれまで比較的大きな病院でばかり働いてきましたので、CTなどの検査もしたいのですが、当院にそこまでの設備はありません。精査が必要な場合や、患者さんの急変時には熊本医療センターを頼りにしています。今後とも宜しくお願い申し上げます。

久留米大学医学部救急医学講座教授・同病院高度救命救急センター長
高須　修先生の特別講演が行われました

2016年９月28日に久留米大学医学部救急医学講座教授・同病院高度救命救急センター長の高須修先生の特別講演が行われました。

高須先生は、前任の坂本照夫教授・病院長の退任に伴い、今年度教授に就任されました。九州で唯一の高度救命救急センターとして救急集中治療医療と救急集中治療医学の先端を走っている同病院の体制、久留米筑後地域の救急医療体制、ドクターヘリシステム、救急ワークステーションを用いたドクターカーシステムなど様々な観点から具体的な数字を示しながら講演していただきました。また今後日本がさらなる高齢社会を迎えるにあたって解決しなければいけない様々な問題点についてもご講演いただきました。講演を聴講した当院のスタッフ・救急隊はうらやましく魅力的に感じたことと思います。

講演される高須　修先生

当院は、久留米大学病院高度救命救急センターに比べるとまだまだ足元にも届きませんが、久留米大学を目指して、日々頑張っていきたいと思います。高須先生、本当にありがとうございました。

（救命救急部医長　原田正公）

職場紹介

医療安全管理室・感染制御室

ユニフォームが新しくなりました

▲医療安全管理室は藤色のユニフォームです

▲男性は紺色のスクラブとズボンです

感染管理認定看護師
益田　洋子

感染管理認定看護師 専従
末永　慎

感染管理認定看護師
一戸　美良

感染管理認定看護師
田代　里美

医療安全管理室は高橋医療安全管理部長のもと医療安全管理係長１名、副看護師長１名、皮膚・排泄ケア看護師１名の計４名からなる部署です。医療安全は、安全で良質な医療を提供できるよう院内のインシデント事例を把握し、再発防止に向け職員への医療安全に関する事項の徹底を行っています。皮膚・排泄ケア看護師は、褥瘡や人工肛門など専門的ケアの相談を受け、実践・指導を行っています。

また、同室内に感染制御室があり、高木感染制御室長のもと感染管理看護師４名からなる部署です。院内感染対策チーム（ICT）を中心に現場で発生した問題に対して、改善に関する介入、現場の教育・啓発を行っています。

（医療安全管理室
副看護師長　田渕　宏）

モニター会議が開催されました

地域住民の皆さまから幅広く意見を聴取し、診療機能の充実を図ると共に、地域に密着した病院として、良質な医療の推進を図ることを目的とする「モニター会議」を９月29日（木）に開催しました。例年７月頃に開催しておりますが、今年は熊本地震の影響で時期を遅らせての開催となりました。

モニター委員として、一新校区自治協議会長の毛利秀士様、森からし蓮根女将の森裕子様、肥後象嵌光助大住工芸（株）代表取締役の大住裕司様、一新校区第10町内自治会長の藤原謙吾様、西山中学校ＰＴＡ副会長の橋本弥生様、一新校区第１町内自治会長の福住いさ子様の計６名の皆さまにご参加頂きました。

会議では、院長より熊本地震時の当院の対応について説明した後に、委員の皆様から当院に対するご意見を頂きました。今回は熊本地震後ということで、当院へのご意見というよりは、地震に関する話題が多くあがりました。委員の皆様の多くが、町内会等の役員を務めておられ、震災時には、家やご家族のことは後回しに、避難所のお世話に出られたり、車中泊をしながら行方不明者の捜索を毎日何時間も行ったというお話をききました。避難所のひとつになった一新小学校では、ピーク時は２千人の避難者がおられたそうです。避難所でエコノミー症候群の疑いやインフルエンザ、感染症が発生したときに、熊本医療センターにお世話になったと感謝のお言葉も頂きました。また、診療にあたった医療スタッフにもケアが必要だったのではないかというお心遣いも頂きました。ご意見としては、

モニター会議の様子

地震で崩落した石垣の後に草が生えて見苦しいということや、坂の下の調剤薬局周辺が人や車の出入りが多いので危険だというご指摘も頂きました。また、看護学校に対する感謝のお言葉として、看護学生が地域の福祉まつりや精霊流しの受付の手伝い、明八橋のお月見会などのイベント等に参加してもらって励みになっている。そのことをぜひ、学生及び教員に伝えてほしいということを言われました。最後に、病院から、10月から運行を開始する国立病院シャトルバスについての説明と多くの方のご利用をお願いして、会議を終了しました。これからも地域住民の皆さまのご意見等を参考にさせて頂きながら、地域に密着した病院となるよう努力していく所存でございます。今後ともよろしくお願い致します。

（管理課長　清水就人）

腎・泌尿器センター

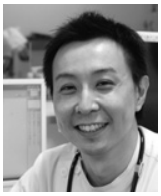
腎・泌尿器センターでは、腎臓内科、泌尿器科が同じ病棟（５西病棟：池田としえ師長）を共有し診療にあたっています。お互い連携はスムーズで、良質で安全な医療の提供を目標に、24時間365日いつでも患者様を受け入れています。総勢13名の大所帯でマンパワーは充実していますので、腎・泌尿器疾患はすべて対応致します。患者様のご紹介、どうぞ宜しくお願い致します。

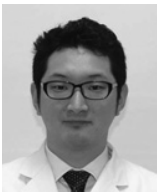
≪腎臓内科≫

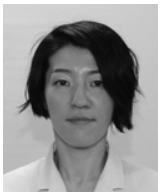
当院が精神科を含めたすべての診療科を備えているため、あらゆる合併症を持つ透析患者の治療を受け入れています。いつからでも透析の対応が可能となるように、緊急透析業務は365日、24時間体制で対応できるようにオンコール体制をとっております。夜間帯で緊急な透析を要するような重症患者様にはICUにてCHDF（持続緩徐型血液透析濾過）治療を受けていただくことも可能です。

急性腎炎、慢性腎炎、ネフローゼ症候群、急速進行性腎炎症候群、急性腎不全、保存期慢性腎不全に対しても迅速な対応が可能です。腎生検検査も４日間入院で検査可能です。またそれらを包括したCKD（慢性腎臓病）としてご紹介いただくことも可能で、熊本市内の腎臓内科を有する病院の中でもCKD紹介は最も紹介件数の多い病院の一つとなっております。シャント手術、シャントPTA、腎生検にも力を入れております。腹膜透析治療も行っております。

部長
富田正郎（とみた まさお）


医長
梶原健吾（かじわらけんご）


医師
尾上友朗（おのうえともあき）


医師
梶原 奈央（かじわら なお）

医師
西口 佳彦（にしぐち よしひこ）

≪泌尿器科≫

人口の高齢化に伴い泌尿器科に紹介・入院されてくる患者様の疾患も多種多様になってきています。**生活の質を低下させる前立腺肥大症や過活動膀胱、尿失禁・骨盤臓器脱あるいは生活習慣病とも捉えられている尿路結石症、寝たきりの患者様の尿路感染症、生命を脅かす癌など様々です。**患者様の置かれた社会的状況や生活背景も考慮しながら、どの治療が最も適切か、医師の独断とならないように十分な説明と同意を得るように心がけ診療にあたっています。

部長
菊川浩明（きくかわひろあき）

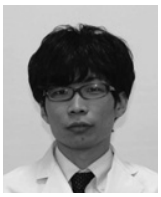
医長
陣内良映（じんのうちよしてる）

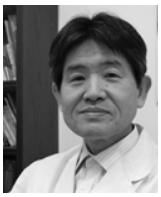
医長
前田喜寛（まえだ よしひろ）

医師
二口芳樹（ふたくちよしき）

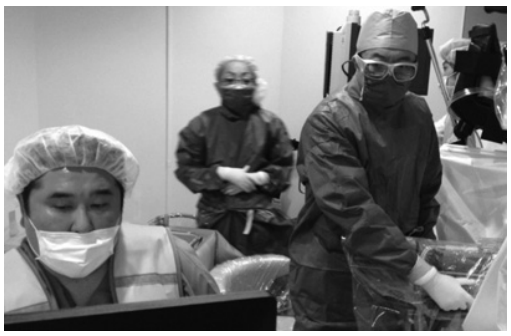
医師
銘苅晋吾（めかるしんご）

医師
鮫島智洋（さめじまともひろ）


医師
上園英太（うえぞのえいた）


医長
土岐直隆（とき なおたか）

前立腺肥大症に対するグリーンライトレーザー治療


前立腺癌に対する密封小線源治療
（ブラキセラピー）

馬場厚生労働大臣政務官が来院されました

９月14日（水）馬場厚生労働大臣政務官が来院されました。また、同省医政局から岩下国立病院機構管理室長及び寺本国立ハンセン病療養所管理室補佐のお二人が同行されました。

院長、副院長他幹部職員で対応しました。はじめに、院長から政務官への挨拶と熊本地震の報告を行いました。政務官からは、地震に対するお見舞いと激励のお言葉を頂きました。政務官は熊本のご出身でもあり、時折、熊本弁を交えての和やかな意見交換となりました。意見交換の後は、病院内をご案内しました。ヘリポート、救命救急センター、ICU、手術室等当院の診療機能の一部をご覧になりました。

馬場大臣政務官と記念撮影

救命救急センターを見学される様子

この日、政務官におかれましては、過密スケジュールの中でのご視察であったため、当院での滞在時間も限られておりましたが、当院の救急医療への対応状況等について、ご理解を頂けたと思います。

大変お忙しい折にご来院頂き感謝を申し上げます。また、今後も変わらぬご指導・ご支援を賜りたいと思います。　（事務部長　内田正秋）

国立病院シャトルバスが運行を開始しました

10月から当院を発着するシャトルバスの運行を開始しました。運行開始に先立ち熊本日日新聞社の紙面にて運行開始の概要等をご紹介頂きました。３日（月）には、運行開始セレモニーを行い、今回のシャトルバス運行に際しご協力を頂いた熊本都市バス（株）の池永代表取締役社長にもお越し頂きテープカットにご参加頂きました。

以前より当院へのバス乗り入れを希望する声は少なくありませんでした。当院としましては、患者さま及びご家族の皆さまが良質かつ適切な医療を受けられるようにという思いもあり、バス乗り入れについて、バス会社にお願いをして参りましたが、なかなか実現に至りませんでした。しかし、今般、熊本都市バス様のご協力により一般バスの当院への乗り入れが実現しました。

テープカットの様子

（事務部長　内田正秋）

第31回シンポジウム －これからの医療－
「熊本地震時の対応と復興」が開催されました

平成28年９月30日（金）、第31回シンポジウムこれからの医療「熊本地震時の対応と復興」が、座長、熊本県医師会理事馬場太果志先生で行われました。被災現場の医師会の立場から上益城郡医師会会長永田壮一先生、医師会の立場から、熊本県医師会西芳徳先生、急性期病院の立場から当院の高橋毅副院長、行政（県）の立場から熊本県健康福祉部健康局長立川優先生、会場からの発言として熊本市医師会の立場から宮本先生から活動報告がありました。益城町の現場の生の活動状況から、熊本県全体の調整活動まで幅広く熊本地震の全体像が浮かびあがりました。問題点として情報の収集、連携が困難であり、指示系統が機能しなかったことがあげられました。参加者は計95名で、熱のこもったディスカッションで盛り上がり、大変、有益なシンポジウムでした。なお、このシンポジウムの内容は、平成28年10月15日（土）の熊本日日新聞くらし（Life）に詳しく報道されました。　　（副院長　片渕　茂）

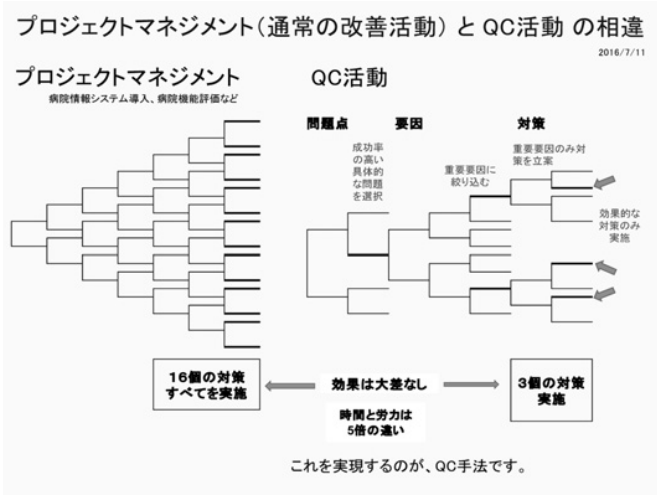
ディスカッションの様子

シンポジウム会場の様子

平成28年度ＱＣ活動中間発表会について

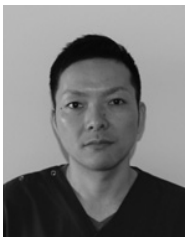
平成28年度QC活動は計24題と多数の申し込みがあり、中間発表会は平成28年９月26日（月）と９月27日（火）の２回に分けて行い、総計170名の参加がありました。医療サービス4題、医療安全４題、経営改善４題、その他12題の発表がありました。発表内容は、問題点の整理、マトリックス図による評価、特性要因図を必須発表項目とし、各グループともレベルの高い発表が多く、約７割は手法に従った効率的な活動が実施できていました。

しかし、QC手法と手法の連携ができていないものや最初から対策ありきの活動もあり、これは非効率的なQC活動になりやすいので注意が必要です。来年２月のQC活動発表会や来年の国立病院総合医学会に向けて、楽しい、活発なQC活動をよろしくお願いいたします。　　（副院長　片渕　茂）



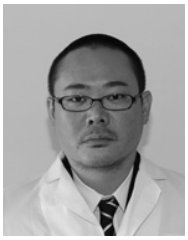
グループによる発表の様子

新任職員紹介



整形外科
酒本（さかもと） 高志（たかし）

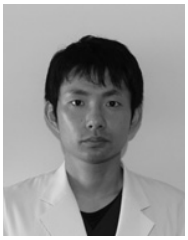
平成28年10月より整形外科で勤務させて頂くこととなりました酒本高志と申します。平成25年熊本大学整形外科に入局後、大学病院、水俣市立総合医療センター、熊本再春荘病院、熊本市民病院に勤務してまいりました。整形外科医としては４年目で未熟なところも多く、皆様にご迷惑をおかけすることも多々あるかと思いますが、少しでも多く熊本の医療に貢献できるよう真摯に医療に取り組んで参りたいと思います。ご指導ご鞭撻の程をよろしくお願い申し上げます。



消化器内科
後藤（ごとう） 知由（ともゆき）

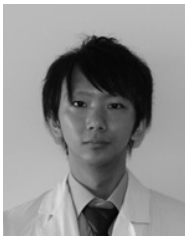
平成28年10月より消化器内科へ赴任いたしました後藤と申します。平成26年に熊本大学消化器内科に入局させていただき、平成27年より熊本市民病院で勤務しておりました。

しかしながら、熊本地震の影響で、熊本市民病院は大幅な縮小での診療再開となりましたので、今回熊本医療センターへ移動させていただきました。まだまだ医師としての経験も浅く、色々と御迷惑をおかけする事になるかもしれませんが、出来るだけ早く当院での診療体制に順応して行くように努力して行こうと考えております。なにとぞよろしくお願いいたします。



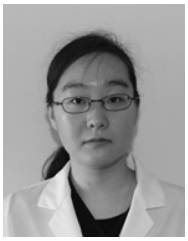
小児科
渡邊（わたなべ） 優（すぐる）

平成28年10月から国立機構熊本医療センターの小児科で働かせて頂くこととなりました渡邊 優と申します。医師５年目、熊本大学小児科に入局して３年目になります。これまで、熊本大学医学部附属病院NICU、熊本赤十字病院、県立延岡病院を経験し、１年半ぶりに熊本に戻ってきました。４月の熊本地震の時は延岡にいたため、自分自身ほとんど被害はなく、延岡病院も無事でした。テレビで熊本の被害の大きさを見たときはショックを受け、地元のために何もできない自分が悔しくありました。これから熊本の小児医療に貢献できるよう一生懸命頑張りたいと思いますので宜しくお願い致します。



皮膚科
木村（きむら） 俊寛（としひろ）

こんにちは。この度、熊本医療センターで勤務させていただくことになりました、皮膚科医２年目の木村俊寛と申します。今年の４月からは熊本市民病院に勤務していましたが、震災の影響でそちらでの勤務継続が困難となり、熊本医療センターに受け入れていただきました。少しでもお役に立てますよう精一杯頑張りますので、何卒よろしくお願いいたします。



神経内科
山川（やまかわ） 詩織（しおり）

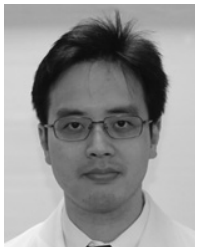
お初にお目にかかります。2016年10月１日より赴任いたしました神経内科医師　山川　詩織と申します。

私は卒後４年目で、神経内科レジデントとしてまだまだ勉強中の身です。出身は熊本市で、高校・大学ともに熊本で、初期研修は熊本大学医学部付属病院で２年間研修し、卒後３年目で熊本大学医学部附属病院神経内科に入局、2016年４月～９月までは済生会熊本病院神経内科で勤務していました。

熊本地震の余波もまだ収まらない中で年度途中の赴任であり、ご迷惑をおかけすることも多いかと思います。まだ道半ばの未熟者でありますが、ご指導・ご鞭撻の程何卒よろしくお願い申し上げます。

医学シリーズ No.231　呼吸器内科（No.６）

最近のトピックス
肺がん薬物療法の新展開



呼吸器内科医長
小野 宏

肺がんの治療はこれまで点滴治療を中心とした抗がん剤治療が主流を占めていました。しかし、ヒトゲノム計画に端を発する遺伝子探索や分子生物学の研究加速など、時代の流れと共にその治療方法は変遷を見せています。

［肺がん分子標的治療］

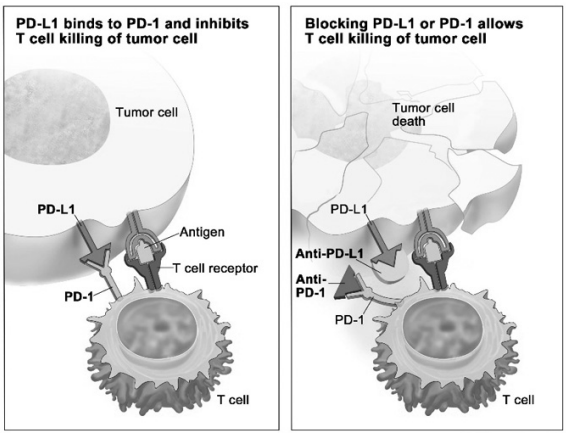
2002年にEGFR（上皮成長因子受容体)チロシンキナーゼ阻害剤であるゲフィチニブ（商品名：イレッサ）が登場して以来、分子標的薬治療が一般化しました。もちろん、これらの長期使用が可能であれば安心できるのですが、薬剤には耐性化の問題が常に付きまといます。EGFRチロシンキナーゼ阻害剤の場合、その作用機序はEGFRの細胞内領域におけるATP結合部位に薬剤が結合することで、チロシンキナーゼの活性化を阻害し、結果としてがん細胞の増殖や進展を抑えます。しかし、間質性肺炎などの重篤な副作用を来すことが判明する一方で投与開始から1年半までに耐性化してしまうことが知られています。その原因として遺伝子変異（代表的にはexon20のT790Mなど）が次々と報告されています。これらによりEGFRチロシンキナーゼ阻害剤の結合部位の形態学的変化を来して耐性化します。

現在、同様作用を示すエルロチニブ（商品名：タルセバ)、この耐性を超えるアファチニブ（商品名：ジオトリフ）も登場。その他、ALK(未分化リンパ腫キナーゼ)阻害剤であるクリゾチニブ（商品名：ザーコリ）や、血管新生阻害剤としての抗VEGF（血管内皮細胞増殖因子)抗体のベバシツマブ（商品名：アバスチン）も登場しました。これらについても次世代のALK阻害剤アレクチニブ（商品名：アレセンサ）の登場、更に欧米ではドセタキセルとの併用療法に限られますが、次世代VEGF阻害剤ラムシルマブの有用性も報告されています。こうした新しい分子標的薬の開発を目指して、腫瘍のもつ遺伝子変異の中でもその形成・生存に不可欠な遺伝子変異、"ドライバー遺伝子変異"を追いかける研究が加速しています。

［肺がん免疫療法：免疫チェックポイント阻害］

一方で、最近頻繁に耳にするようになった免疫チェックポイント阻害薬についてもその研究は加速しています。1890年にColey Wによるがんに対する免疫応答の存在の提唱に始まり、がん免疫分野における研究が加速しました。1992年に京都大学医化学教室の研究として、生体内における免疫反応を制御するPD-1分子の発見や、そのリガンドとしてのPD-L1、PD-L2の発見がなされ、2002年にはPD-1を介したがん細胞の免疫抑制作用を阻害することで腫瘍の治療を行える可能性が示されました。

PD-1は共刺激受容体として自己免疫を防ぐ“免疫寛容”に関わる免疫チェックポイント分子であり、T細胞、B細胞、NK細胞やTreg.などのリンパ球に認められます。この“免疫寛容”とは、その受け手側の細胞（通常の免疫機構では抗原提示細胞や一部の腫瘍細胞）のPD-L1、PD-L2と、攻撃側であるリンパ球のPD-1が結合することで、リンパ球の攻撃を弱める機構を指します。がん細胞はこの機構を逆手に取り、リンパ球の攻撃を交わす巧みな手段を用いているのです。（図：PD-1とPD-L1、抗PD-1抗体と抗PD-L1抗体の作用部位）



https://www.cancer.gov

これが今日のがん免疫療法、免疫チェックポイント阻害薬の登場に結び付きます。これまでの化学療法は非特異的にがん細胞を攻撃するような点滴抗がん剤、

次ページに続く

前述のような特異的なシグナル伝達を阻害する分子標的薬が主流でしたが、リンパ球のT細胞とがん細胞の間で繰り広げられる"免疫寛容"機構を阻害することで前者の活性を促し、がん細胞への攻撃を強化する点でその機能を全く異にしています。

代表的な薬剤としてPD-1に対する抗PD-1抗体：ニボルマブ（商品名：オプジーボ）が挙げられます。この薬剤はT細胞上のPD-1分子と結合してがん細胞上の発現するPD-L1、PD-L2との結合を抑制し、T細胞の抗腫瘍効果を維持することで抗癌効果を発揮します。その効果は広く認められ、米国における非小細胞肺がん患者における二次治療の主流となっています。しかし、本来有するその"免疫寛容機構"阻害による副作用として、免疫関連有害事象(irAE)が知られ、甲状腺機能低下、肝機能障害、大腸炎、間質性肺炎、1型糖尿病、重症筋無力症等があり、これらに留意しつつ投与がなされます。また、B型・C型肝炎ウイルス感染症や結核感染患者ではこれらの免疫応答を増強し得るために、症状が重篤化する危険性があります。現在欧米ではより副作用の少ない同系統の薬剤としてペンブロリツマブが登場し、PD-L1の発現量に奏功率が依存することが確認されるなど、免疫チェックポイント阻害薬の開発も日進月歩で進みつつあり、こうした免疫チェックポイントに関わる分子の発見に関する報告も数多く報告され、今後のこの分野における薬剤開発が期待されています。

いま、国立病院機構
熊本医療センターで
何が研究されているか

シリーズ109回

関節可動域運動開始日の違いによる人工膝関節置換術後の経過
～翌日群と４日目群の比較～

リハビリテーション科　主任理学療法士　渡邉靖晃

人工膝関節置換術後（以下、TKA）に対する多くの医療機関の理学療法は、早期の膝関節可動域獲得、ADL自立および社会復帰を目的に術後早期からの他動関節可動域（以下、ROM）運動や起立歩行練習、ADL練習が行われています。

【目的】当院では、創傷治癒過程および早期からのROM運動による疼痛と腫脹の増加による苦痛増強を考慮し、2014年３月から術後４日目からのROM運動開始へと変更しました。そこで今回、ROM運動開始日の違いが、膝関節可動域獲得へ及ぼす影響について検討しました。

【方法】対象は2013年２月から2015年３月までの間に、当院にて初回片側TKAを施行した148例148膝で、診断名が変形性膝関節症141例、関節リウマチ５例、骨壊死２例であった（年齢75.4±7.5歳、男性26例、女性122例）。方法は術後翌日からROM運動を開始した70膝（翌日群）と術後４日目からROM運動を開始した78膝（４日目群）に分け、術後在院日数、関節可動域（術前、術中、術後１週、退院時、最終調査時）および経過観察期間を後ろ向きに調査し比較しました。統計処理は、Mann-WhitneyのU検定を用いて２群間での差の有無を確認しました。

【結果】術後１週と退院時の膝屈曲/伸展ROM（°）の中央値（四分位範囲）は、それぞれ翌日群で100（95-106）/-5（-5-0）、110（105-115）/0（-5-0）、４日目群が100（90-105）/-5（-10-0）、110（100-115）/0（-5-0）であり、両者ともに４日目群で有意に低下していました。経過観察期間は、翌日群で12（10-22）ヵ月、４日目群が６（4.5-8）ヵ月であり、有意に短期間でした。しかし、最終調査時の膝屈曲/伸展ROM（°）は、翌日群で125（120-135）/0（0-0）、４日目群が122（110-130）/0（0-0）と有意差は見られませんでした。その他、術後在院日数、術前/術中可動域では有意差は見られませんでした。

【結論】４日目群で入院中の可動域は有意に低下していましたが、影響は少なく最終調査時では翌日群と同等の可動域を獲得していました。よって、術後４日目からのROM運動の開始でも翌日群と遜色ない結果を得ることが示唆されました。

【表1】

		翌日群(n=70)	4日目群(n=78)
〔年齢〕（歳）		77（71-81）	76（70-79）
〔術前〕	膝屈曲（°）	120（110-128）	120（110-130）
	伸展	-5（-10-0）	-5（-10-0）
〔術中〕	屈曲	130（120-135）	130（120-135）
	伸展	0（0-0）	0（0-0）
〔術後1週〕	屈曲	100（95-106）	100（90-105）*
	伸展	-5（-5-0）	-5（-10-0）*
〔退院時〕	屈曲	110（105-115）	110（100-115）*
	伸展	0（-5-0）	0（-5-0）*
〔最終調査時〕	屈曲	125（120-135）	122（110-130）
	伸展	0（0-0）	0（0-0）
〔術後在院日数〕（日）		17（14-20）	16（14-20）
〔経過観察期間〕（ケ月）		12（10-22）	6（4.5-8）*

中央値（四分位範囲）　＊P＜0.05

研修医レポート

臨床研修医
矢野（やの） 雄久（たかひさ）

こんにちは。研修医１年目の矢野雄久と申します。久留米大学を卒業し、４月から熊本医療センターで初期臨床研修をさせていただいております。研修開始から半年以上が経ちましたが、未だに分からない事が大変多く、スタッフの皆さんにご迷惑をお掛けしてばかりいる毎日ですが、精一杯頑張らせて頂いています。麻酔科から研修スタートした３日後に熊本地震が発生し、研修医１年目は救急外来に配属されました。自分が右も左も分からない状態で右往左往しているのを尻目に、２年目の先輩方がキビキビと働いているのを見て感嘆したのを今でも覚えています。

地震の混乱も収まり、麻酔科での研修を再開しました。麻酔科では挿管やルート確保、腰椎穿刺等の手技や、手術前後の全身管理について経験しました。人工心肺等の医療機器についても学ぶ事が出来ました。

次いで、消化器内科で研修行いました。病棟業務を行うのは初めてで、まずは電子カルテの使い方を覚えるのに精一杯でした。何度もご迷惑をおかけしましたが、その度に指導医の先生や先輩方に熱心に指導して頂きました。消化器内科として腹部エコーのあて方や病棟での治療など多くの事を学ばせて頂きました。また、貴重な症例を経験させて頂く事も出来ました。

続く糖尿病・内分泌内科では、糖尿病教育入院の基本的な血糖コントロールや治療だけでなく、患者教育についても学ぶ事が出来ました。糖尿病だけでなく、救急症例や、その他の内分泌疾患についても数多く担当させていただき、毎日が勉強の連続でした。

現在は外科での研修を行っています。始まったばかりで慣れない事も多いですが、今後も精一杯努力して行きたいと思います。この先も多くのご迷惑をおかけするとは思いますが、今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

臨床研修医
竹本（たけもと） 梨紗（りさ）

平成28年度初期臨床研修1年目の竹本梨紗と申します。すっかり秋めいて参りましたが皆さまいかがお過ごしでしょうか。

３月に大学を卒業し、早いもので、私の医師として最初の半年が過ぎてしまいました。４月から消化器内科、麻酔科、循環器内科の順に研修させていただき、現在は救急外来にて患者様の診療にあたる毎日を過ごしています。

消化器内科・循環器内科では救急疾患を経験することも多く、また麻酔科ではバイタルサインの評価や静脈路確保、腰椎麻酔、気管挿管などの手技を沢山経験させていただきました。救急外来では、これまで得た知識や技術が要される場面が多くあって、自分なりのフィードバックとしても充実した日々を送れているように感じます。

もちろん、日々新しいことに出会うことの方が多く、その度に上級医の先生方や知識の豊富なコメディカルスタッフの方々に助けられながら、いつも新鮮な気持ちで研修に臨めています。設備に恵まれているが故、CT検査も簡単に施行できてしまう環境ではありますが、的確な問診と身体診察で鑑別を絞り込み、必要最低限の検査で診断、治療まで行えることを目標に勉強しているところです。

医局はというと、震災の影響で異動もありまして、同期の仲間が増え、大変賑やかになっています。各科ローテートで配属はそれぞれ違いますが、顔を合わせればお互いの近況を報告しあって、良い刺激をもらっています。また、飲み会やアウトドア等（ほぼ飲み会ですが）、外に連れ出してくれる方々が職場に大勢いることも、活力源の1つとなっているように思います。

今年度後半もより良い研修を送れるように体力をつけるため、自宅にトレーニンググッズが増えてきました。効果のほどは未だ不明ですが、研修同様、持久力で頑張っていきます。皆さまにおかれましても、朝晩冷え込みますのでお風邪等引かぬよう、ご自愛ください。

研修のご案内

第66回　症状・疾患別シリーズ（会員制）
［日本医師会生涯教育講座2.5単位認定］

日時▶平成28年11月５日(土)15：00～17：30
場所▶国立病院機構熊本医療センター地域医療研修センター

座長：八代更生病院　理事長　宮本憲司朗　先生

演題：「うつ病と自殺予防」

１．当院における自殺予防の試み
国立病院機構熊本医療センター救命救急科医長　橋本　聡

２．熊本県の自殺好発地域における高齢者うつの実態調査
熊本大学保健センター教授　藤瀬　昇　先生

３．うつ病にまつわる臨床雑感
向陽台病院　院長　中島　央　先生

この講座は有料で、年間10回を１シリーズ（年会費10,000円）として会費制で運営しています。但し、１回だけの参加を希望される場合は１回会費2,000円で参加いただけます。

〔問合せ先〕国立病院機構熊本医療センター　地域医療研修センター事務局
TEL 096-353-6501（代表）内線2630　096-353-3515（直通）FAX 096-352-5025（直通）

第182回　三　木　会（無料）
（糖尿病、脂質異常症、高血圧を語る会）
［日本医師会生涯教育講座1.5単位認定］
［日本糖尿病療養指導士認定更新のための研修単位＜２群＞0.5単位認定］

日時▶平成28年11月17日(木)19：00～20：45
場所▶国立病院機構熊本医療センター研修室２

１．「高血糖時に認められる頭部MRI所見について」
国立病院機構熊本医療センター糖尿病・内分泌内科　吉永礼香

２．「糖尿病チーム医療　～わがクリニックにおける患者支援～」
医療法人 ウェルネスサポートシステム とだか内科クリニック院長　戸高幹夫　先生

なお、興味のある症例、疑問・質問のある症例がございましたら、お持ちいただきますようお願い致します。

〔問合せ先〕国立病院機構熊本医療センター糖尿病・内分泌内科部長　西川 武志 TEL 096-353-6501（代表）内線5441

第213回　月　曜　会（無料）
（内科症例検討会）
［日本医師会生涯教育講座1.5単位認定］

日時▶平成28年11月21日(月)19：00～20：30
場所▶国立病院機構熊本医療センター研修室２

１．内科基礎講座　診療で遭遇した興味ある症例の検討を行います。
「第１症例　血小板減少例におけるESD療法の新しい工夫」
国立病院機構熊本医療センター消化器内科　柚留木秀人
「第２症例　譫妄にて紹介された症例について」
国立病院機構熊本医療センター神経内科医長　田北智裕

２．ミニレクチャー「深部静脈血栓症について」
国立病院機構熊本医療センター循環器内科　片山哲治

日頃、疑問の症例、興味のある症例、X線、心電図、その他がございましたら、ご持参いただきますようお願い致します。

〔問合せ先〕国立病院機構熊本医療センター統括診療部長　清川 哲志　TEL：096-353-6501（代表）FAX：096-325-2519

第150回　救急症例検討会（無料）

日時▶平成28年11月30日(水)18：30～20：00
場所▶国立病院機構熊本医療センター地域医療研修センター

症例検討「 航空医療（兼熊本県ヘリ救急運行調整委員会症例検討部会）」
司会：国立病院機構熊本医療センター救命救急集中治療部医長　原田正公

医師、薬剤師、看護師、放射線技師、臨床検査技師、栄養士、救急隊員、事務部門等、全ての医療従事者を対象とした症例検討会です。医師以外の方にも理解できるよう配慮した内容にしています。
事前参加のお申し込みは必要ありませんので、ご自由にお越しください。

〔問合せ先〕国立病院機構熊本医療センター　地域医療研修センター事務局 TEL 096-353-6501（代表）内線2630　096-353-3515（直通）

2016年 研修日程表 11月

国立病院機構熊本医療センター　地域医療研修センター

11月	研修センターホール	研　修　室
1日 (火)		
2日 (水)	**18：00～19：30　第101回 国立病院機構熊本医療センター クリティカルパス研究会（公開）**	
3日 (木)		
4日 (金)		
5日 (土)	**15：00～17：30　第66回 症状・疾患別シリーズ 「うつ病と自殺予防」 ［日本医師会生涯教育講座1.5単位認定］ 座長　八代更生病院 理事長　宮本憲司朗　先生 1．当院における自殺予防の試み 国立病院機構熊本医療センター救命救急科医長　橋本　聡 2．熊本県の自殺好発地域における高齢者うつの実態調査 熊本大学保健センター教授　藤瀬　昇　先生 3．うつ病にまつわる臨床雑感 向陽台病院 院長　中島　央　先生**	
6日 (日)	9：00～13：30　第12回 熊本PEECコース	
7日 (月)		
8日 (火)		
9日 (水)		
10日 (木)	7：30～8：15　二の丸モーニングセミナー 「画像診断」 国立病院機構熊本医療センター放射線科医長　根岸孝典	
11日 (金)		
12日 (土)		
13日 (日)	10：00～12：00　熊本県滅菌消毒法講座	
14日 (月)		
15日 (火)	19：30～20：30　第49回 熊本摂食・嚥下リハビリテーション研究会 「明日から使える食事介助」 西日本病院介護福祉士　白石貴照　先生 熊本リハビリテーション病院摂食・嚥下障害看護認定看護師 城　仁美　先生 国立病院機構熊本医療センター摂食・嚥下障害看護認定看護師 田平佳苗	
16日 (水)	12：55～17：30　平成28年度 院内感染対策研修会（国立病院機構） （第１日目）	
17日 (木)	7：30～8：15　二の丸モーニングセミナー 「薬剤部からのフィードバック」 国立病院機構熊本医療センター薬剤部長　中川義浩 8：30～17：20　平成28年度 院内感染対策研修会（国立病院機構） （第２日目）	**19：00～20：45　第182回 三木会（研２） （糖尿病、脂質異常症、高血圧を語る会） ［日本医師会生涯教育講座1.5単位認定］ ［日本糖尿病療養指導士認定更新のための研修単位＜２群＞0.5単位認定］**
18日 (金)	8：30～16：30　平成28年度 院内感染対策研修会（国立病院機構） （第３日目）	15：30～16：45　肝臓病教室（研２） 「B型・C型肝炎の抗ウイルス治療」
19日 (土)		
20日 (日)		
21日 (月)		**19：00～20：30　第213回 月曜会（内科症例検討会） ［日本医師会生涯教育講座1.5単位認定］**
22日 (火)	18：30～20：30　血液研究班月例会	19：00～21：00　小児科火曜会（研１）
23日 (水)		
24日 (木)	7：30～8：15　二の丸モーニングセミナー 「リスクマネジメントからのフィードバック」 国立病院機構熊本医療センター医療安全係長　堂園千代子 14：00～15：00　第44回 市民公開講座 「心筋梗塞について」 国立病院機構熊本医療センター循環器内科医長　松川将三 18：30～20：00　熊本県臨床細胞学会 ＜細胞診月例会・症例検討会＞	19：00～21：00　熊本脳神経疾患懇話会（研２）
25日 (金)		
26日 (土)		
27日 (日)		
28日 (月)		
29日 (火)		
30日 (水)	**18：30～20：00　第150回 救急症例検討会 「航空医療」 （兼熊本県ヘリ救急運行調整委員会症例検討部会）**	

研１～３　２階研修室１～３

※二の丸モーニングセミナーにつきまして、詳細はホームページ（http://www.nho-kumamoto.jp/）をご参照ください。

問い合わせ先　〒860-0008　熊本市中央区二の丸１番５号　国立病院機構熊本医療センター２階　地域医療研修センター TEL 096-353-6501（代）内線2630　096-353-3515（直通）